



Data

監督・脚本：万玛才旦（ペマ・ツェテン）

出演：索朗旺姆（ソナム・ワンモ）
／金巴（ジンバ）／杨秀措（ヤンシクツォ）

👁️👁️ みどころ

風船の色はいろいろだが、やっぱり「赤い風船」がベスト！そんなタイトルの名作もあったが、本作冒頭に登場するのは白い風船だし、形もヘン。

何とこれは“一人っ子政策”下で不可欠な“アレ”だったからビックリ！“アレ”が不足すると、とんだ“失敗”も。ましてや、立派な種羊と同じくらいたくましい夫と夜の生活を営んでいると・・・。

他方、輪廻転生が信じられ定着しているチベットの草原では、第四子の妊娠は亡き祖父の転生！単純にそう信じ込めれば嬉しいが、さて現実とは？

詩的で圧倒的な映像美にうっとりしながら、ストーリーの秀逸さにも、そしてクライマックスに見る“赤い風船”の対比にも感嘆！恐るべし、チベットの万玛才旦（ペマ・ツェテン）監督！



■□■始まりは2個の白い風船から！しかしその形はアレシ？■□■

中国の“一人っ子政策”は1949年に始まり2015年に終わった。その期間中は中国13億人民にさまざまな避妊具が使われたはずだから、その数は膨大。もっとも、チベット族には一人っ子政策も緩和されていたから、3人までは許されていたらしい。しかし、本作の舞台となるチベットの草原地帯では、タルギェ（ジンバ）とドルカル（ソナム・ワンモ）夫妻は既に中学生を筆頭に3人の男の子を育てていた。

馬の“種付け”シーンも相当迫力があるが、本作では、タルギェが友人から借り受けた、いかにも精力の強そうな種羊による“種付け”シーンが衝撃的。その種付けのシーンを巡って、夫婦間で「立派な種羊だろ」「あんたみたい」との2人だけの秘密の会話が登場するが、そんな夫婦の“夜の営み”には“アレ”が不可欠だ。ところが、冒頭のシークエンスで下の男の子2人が遊びまわっている白い風船を見ると、形が真ん丸ではなく少しヘン。

その正体に気付いたタルギェが慌ててそれを割ってしまったのは当然だが、一緒に暮らしている祖父にはなぜタルギェがそんないじわる(?)をするのかわからないらしい。なるほど、なるほど・・・。

ペマ・ツェテン監督が本作を思いついたのは、“ある偶然の出来事”からだそうだが、「赤い風船」と聞けば、アルベール・ラモリス監督の『赤い風船』(56年)や、台湾の侯孝賢(ホウ・シャオシェン)監督の『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』(07年)(『シネマ20』258頁)を思い出す。本作ラストは何とも素晴らしい「赤い風船」のシークエンスになるからそれに注目だが、それと対比する意味でも、また本作のストーリー形成の軸を理解する上でも、本作の冒頭に登場する2人の子供が持つ2個の白い風船に注目!

■□■アレより避妊手術の方が!女先生に相談すると?■□■

産婦人科の医師はやっぱり男性より女性の方が安心?今の日本の女性にそんな意識があるのかどうかは知らないが、ドルカルを見ていると、チベットでは今でも“その方面の相談”は女先生の方が安心らしい。そのため、わざわざ1人でバイクに乗って湖東診療所を訪れたドルカルは、男先生から「世界は変わったのに君たちは何も変わらない」と皮肉を言われながら、女先生が帰ってくるのを待つことに。

そして、戻ってきた女先生に小さな声で相談したのは、避妊手術をしてもらおうと思っていること。「コンドームは?あれなら簡単でしょ?」と言う女先生に対して、「子どもたちが風船にしちゃって・・・」と恥ずかしそうに答えている風景は微笑ましい。そこでまとまった結論は、来月に避妊手術をすることだが、コンドーム不足を気遣った女先生が、自分の分を1個ドルカルに与えてくれたのはさすが。日本なら、ドラッグストアに行けばいくらでも入手できるが、後でわかるように、チベットではそれも配給制らしい。しかし、あの立派な種羊と同じくらい“精力的”なタルギェとの夜の夫婦生活が続くとすれば、アレはたった1個で大丈夫なの?

しかも、本作ではあえてしっかり者のドルカルが、コンドーム隠しにかけては不用心なように描かれている。つまり、布団の下に隠していたはずの大切な1個も2人の子供に発見された結果、再び白い風船として有効活用(?)されてしまうので、それに注目!その有効活用とは、隣に住む男の子が大切にしていた笛との物々交換だが、それがバレると、タルギェは近所の男から「子供のしつけがなつとらん!」と責められ、取っ組み合いの大ゲンカにまでなってしまうから、コトは笑い事ではない。それははともかく、布団の下に隠していたはずのアレがないとわかれば、タルギェの性的欲求は抑えられるの?また、来月の避妊手術を控えたドルカルの対応は?

本作は色気狙いの映画ではないから、そんな夫婦の“秘め事”は描かれないが、次に診療所を訪れて尿検査をしたドルカルの目の前に突き付けられた現実とは?

■□■チベット仏教における輪廻転生とは?その定着ぶりは?■□■

チベット仏教には、有名な輪廻転生の教えがある。これは「すべての生きとし生けるも

のは輪廻転生する」という教えて、「一時的に肉体は滅びても、魂は滅びることなく永遠に継続する」というチベット仏教独特の世界観だが、日本人にはその世界観はほとんど理解不可能。せいぜい理解できるのは、山田風太郎の原作を映画化した『魔界転生』(81年)、『シネマ3』310頁)ぐらいだ。しかし、本作のお風呂のシーンで、長男ジャムヤンの背中の中ホクロを見せてくれとせがむ2人の弟や、それを見て「ばあさんが家族に転生したとはありがたい」と語る祖父の姿を見ていると、この家族たちが輪廻転生を信じ込んでいることがよくわかる。

その直後に見る、突然亡くなった祖父のチベット葬儀の姿も興味深い、「父がいつ転生するか教えてください」と質問するタルギェに対して、チベット高僧が「家に帰ったら僧侶を招きお経を唱えなさい。そうすれば家族の中に転生する」と答える姿も興味深い。日本ではこんな会話はありえないし、お寺の僧侶がこんな予言をすれば、医師法違反にもなりかねない。しかし、チベットでは今でもそれを信じているから、その直後にドルカルの子を産んだと聞かされたタルギェが「こんなに早く祖父が転生したか」と喜んだのもうなずける。チベットの高僧の言葉を100%信じているタルギェは、4人目の出産が違反であることや、経済面や教育面から考えても、4人の子持ちになるのがいかに大変かについてほとんど目が向かないようだ。

思いもしなかった「受胎告知」に動揺したのは、4人目の子育てがいかに大変かをよく知っているうえ、女先生からも「墮ろしなさい。また産んだら罰金よ」ときつく言われていたドルカル。そんなドルカルの気持ちが、墮ろす方向に傾いていたことは明らかだ。しかし、それをしっかり相談したかったドルカルに対して、タルギェが述べた言葉は・・・？そして、その時はじめてタルギェはドルカルに手をかけてしまったから、さあ大変。こんなことをしていると、夫婦間の溝はどんどん深まっていくばかりだが・・・？

■□■チベット尼僧にも注目！妹はなぜ尼さんに？■□■

私は2000年以降、弁護士と映画評論家の“2足の草鞋”を履いているが、ペマ・ツェテン監督は映画監督と小説家という2足の草鞋を履いているようだ。1991年に、西北民俗学院に入学し、在学中に小説家としてデビューした彼は、国内外で数々の文学賞を受賞。その後、2002年に北京電影学院に入学し、文学部で映画脚本と監督学を学び、映画製作を始めたそうだから、すごい。

パンフレットの「監督インタビュー」によると、本作はすべて彼のオリジナルストーリーだが、本作については、最初の脚本と原作小説、そして映画にされた本作の脚本がそれぞれ別々にあるらしい。本作については、ラストの「赤い風船」のシークエンスがビジュアル的に素晴らしいが、それは映画ならではの演出。このように、同じテーマながら小説と映画の双方でそれぞれ似て非なる素晴らしい世界を作り上げるわけだから、彼の2足の草鞋の履き方は素晴らしい。

本作で驚いたのは、本作のサブストーリーとして重要な役割を果たす、ドルカルの妹で、

チベット尼僧のシャンチュ・ドルマ（ヤンシクツォ）が、原作小説にはまったく登場しないこと。ドルカルがなぜタルギェと結婚したのかについて、本作はまったく触れないが、長男ジャムヤンが通学する青海湖チベット中学校で、偶然別れた元恋人のタクブンジャと出会うシークエンスに登場してくるシャンチュとドルカルとの会話の中で、この姉妹のそれまでが暗示されてくる。幸せな結婚をし、3人の子供に恵まれた姉のドルカルに対し、今は小説まで発表しているタクブンジャと別れて尼僧になる決心をし、完全に世俗世界から離れてしまった妹のシャンチュは両極端な立場だが、女という面では共通しているから、今の時代状況を生きていくについて、それぞれ大きな悩みがあるのは当然。タクブンジャがシャンチュに手渡した小説の中には、タクブンジャがシャンチュと過ごした日々が書かれているらしいから、シャンチュがそれを読みたがったのは当然。しかし、ある日その本を発見したドルカルは、今更そんなものはいらないと考え、その本を火の中へ。すると、それに対するシャンチュの対応は？

ペマ・ツェテン監督が小説家や脚本家として非凡な才能を持ち、また北京電影学院で監督学を学んだ映画監督として非凡な才能を持っていることは、本作にシャンチュを登場させ、今のチベットを生きる女性の悩みや問題点を過不足なく、2人のセリフの中で語らせている脚本や演出を見ていると、よくわかる。尼僧の物語は、オードリー・ヘプバーン主演の『尼僧物語』(59年)等を見てもわかる通り、それだけでも結構面白いものが多いが、本作ではシャンチュの物語が主役のドルカルをうまく引き立てるサブストーリーとして実によく構成されているので、本作では面白いチベット尼僧の帽子をかぶったシャンチュにも注目！

■□■墮ろすの？それとも？ドルカルの決断は？夫と長男は？■□■

『在りし日の歌（地久天長）』（1999年）は、1980年代の改革開放政策の中で始まった「一人っ子政策」を巡る2組の夫婦の葛藤の姿を描いた名作だった（『シネマ47』32頁）。同作では、第二子の妊娠に喜んだのもつかの間、「計画生育」にそれを知られたため、強制的に墮胎させられる悲しい姿が描かれていた。しかし、本作ではそれほどの危機はなく、罰金を支払い、その他アレコレの不利益措置さえ我慢すれば、出産自体はオーケー？第四子の妊娠は祖父の輪廻だと固く信じているタルギェが、墮ろすことを絶対に認めなかったのは当然だ。

タルギェがドルカルに対して「あの時ぶったのは悪かった。あんなことは二度としない」と謝ったのが立派なら、「産んでくれれば酒もタバコもやめる」と宣言したのも立派。去る2月4日に女性差別発言の謝罪会見をした森喜朗東京五輪・パラリンピック組織委員会会長の姿には反省の姿は見られず、むしろ居直りの面が強かったが、本作のタルギェの反省と禁酒禁煙の決意は固そうだから、これならドルカルも受け入れるのでは？それに対するドルカルの返事は明確ではなかったが、ある日ドルカルは1人で湖東診療所を訪れ、墮胎手術のためのベッドに横たわっていたから、アレレ？夫のタルギェがあれほど頼んだのに、

なぜドルカルはそれを受け入れず墮胎の道を選んだの？

しかし、幸いなことにまだ手術は始まっていないうえ、そこではタルギェと一緒に駆け付けてきた長男のジャムヤンが、涙ながらに必死で「産んでくれ」と頼んだから、それを聞いたドルカルはさすがに方針転換……。私はそう思ったが、さて、ドルカルの最終決断は？私を含む観客の注目がその一手に集まったのは当然だが、そこでペマ・ツェテン監督はうまくそのテーマをずらしていくから、なるほど、なるほど……。

■□クライマックスの赤い風船に注目！このシーンは永遠に■□

2000年以降、中国に20回以上旅行に行っている私の楽しみの1つは、足つぼマッサージや市場での庶民的な買い物だが、本作のクライマックス直前には、病院帰りに市場をうろつくタルギェの姿が登場する。それが、本作導入部で下の弟たちと交わした「今度町に行けば、風船を買ってきてやる」という約束の履行のためだったのか、それとも手術台に横たわるドルカルの姿を見て動揺した気持ちを静めるためだったのかはわからないが、市場をうろつく途中で風船売りの姿を見つけたタルギェは、約束通り大きな赤い風船を2個購入することに。ちなみに、そこでの風船1個の値段は多少錢？（How Much?）

しかして、本作クライマックスに向けては、冒頭のシークエンスとは対照的に、まん丸い赤い風船2個をバイクに括り付けて帰ってくるタルギェの姿が映し出されるから、下の2人の子供たちは大喜びだ。さあ、子供たちはこの風船でどんな風に遊ぶの？そう思っていると、アレレ……。1つは突然割れてしまったうえ、2人で残りの1個を奪い合っているうちに、さらにアレレ？高村光太郎が『智恵子抄』の中で詠んだ歌は「東京の空 灰色の空」だから、そんな空にはいくら赤い風船でも似合わない。しかし、草原の上いっぱい広がる青い大空の中に、大きな赤い風船が舞い上がっていけばよく似合うし、その風景は美しい。2人の子供が呆気にとられながらそれを見上げていたのは当然だが、それを見上げていたのはバイクを走らせていたタルギェも同じ。そして、その他にも、……。

アラン・ドロンが主演したルネ・クレマン監督の『太陽がいっぱい』（60年）のあっと驚くラストは強烈な印象を残したが、本作のラストシーンもそれと同じくらい、永久に忘れられない美しいラストシーンになるはずだ。

2021（令和3）年2月10日記